
底なし沼

花村かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

底なし沼

【Nコード】

N3630BA

【作者名】

花村かおり

【あらすじ】

私が夢の中で出会う女性。彼女は自分が夫を底なし沼に沈めてしまったのだと、私に涙ながらに語りかける。

底なし沼 1

嫌なことがあると良く見る夢がある。

底なし沼の辺に立って、ぼんやり沼面に映っている自分をジッと観ている。

暫くすると鬚を結って、木綿の着物をきた女性が後ろからあらわれ自分に重なり、一つとなってしまう。

その女性はうつつと唸ると赤い顔をして涙をホ口ホ口流してしまう。ある日、私はその女性に尋ねてみた。

その女性と一つに重なっているのにどうやって尋ねるかと疑問に思うが、それは夢であるから自在にできるのだ。

「あなたは どうして泣いておられるのです」

「夫を亡くしてしまったからです」と声も絶え絶えで女は答えた。

「それは、それは、ご愁傷様です」と私は言った。

それから、女は泣きじゃくるばかりなので、私は

「あの、尋ねても宜しいでしょうか？」と尋ねてみた。

「ええ、夫はこの沼に沈んでしまい、二度と出られなくなりました。村の伝承によると、この沼は底なし沼で一度足を入れてしまうと、ずんずんと引き込まれてしまうんです」と女は俯き、声を枯らしながら言った。

「なぜ、旦那様はこのような危ないところに足を入れてしまったのでしょうか？」

「ええ、実はと言うと、私が突き落としてしまったんです。そして村の伝承どおりに、あれよあれよと夫は沼の奥深くに沈んでいきました。そして、私も後を追おうとして足を踏み入れたのです」と言う女はさらにさめざめと泣くのであった。

「ええ」と私は驚きながらも尋ねる。

「しかし、どうしてでしょう？ 私は一向に沈まない。膝ぐらいの深さまでしか行けないのです。それで未練がましく、ここで夫の供養

をしているわけでございます」と女は言った

「そうなのですか」と私は返すこともなく頷くことしかできない。

「いつしか、私も寿命がきて、この世を去りました。しかし、新しい世に生まれ変わっても、夫のことが忘れられず、こうして夢の中で供養をしているわけです」と女は気を取り直したように、気丈な口調で話した。

「と、いうと？」と私は尋ねた。

「そう、私は貴方に生まれ変わってもなお、夢の中で夫を追い続けているわけです」と女は言った。どうやら私はこの女の生まれ変わりにらしい。

「しかし、旦那様もきつと生まれ変わっておられるでしょうか？もうそろそろ良いのではないのでしょうか？」と私は女を慰めようと精一杯に言った。

「いえ、未練があり、まだ魂がさまよっている事でしょう」とめそめそ泣き止まず、私は声をかけられず、明け方早くに目が覚めるのである。

底なし沼2

その夢のことを恋人のヒロに話してみた。

「不思議なことに毎回同じで進展がないのよ。私も夢見が悪いのが嫌だから、何とかしたいのだけれど」

「すると君は夫殺しの生まれ変わりか。俺もそのうち沼に突き落とされて殺されてしまうのかなあ」と冗談ぽく笑っていった。

「もう、ひとごと、なんだから」と私は不満そうに言った。

「私の育った町に古いお寺があるのだけれど、そこに底なし沼であるという伝承の沼があるの。見た目はなんら変わらない、おたまじやくしが泳いでいる沼なのに、昔々、水牛が足を滑らせて、池に落ちてしまい、人間が助ける間もなくあれよ、あれよと沼深く沈んでいったって石碑に書いてあったわ」と私はもしかしたらあの池のことなのかしら、と思って言った。

ヒロは「その石碑を詠んだことが強烈で夢に出てきたんじゃないか？」と言った。

確かに子供のころに読んだあの石碑の物語が強烈であったことは確かである。なるべく沼には近づかないよう遠くで沼をうかがうように覗いていたことを思い出した。

「そうなのかなあ」と私は答えた後、「でも今度同じ夢を見たら、その人に尋ねてみようと思うの。何故、夫を沼に突き落としたのかって」と言った。

「夢がコントロールできたら楽しいね」とヒロが全く「ひとごと」として答えていた。

しかし、そう決心してみても、確かにヒロが言うように、自分が見る夢を思い通りにコントロールすることは出来ず、しばらくその夢を見ることがなかった。

数ヶ月経ったころ、やっと、その夢にたどり着いた。いつものように女は泣きじゃくるばかりである。

「何故、旦那様を突き落としてしまったのですか？」とやつのことで尋ねることができた。

すると女は言葉少なく話を始めた。

「彼岸を少し過ぎた頃のことでした。私の住む武州の西のはずれにある山間の小さな村では、前日に雨が降っておりましたが、朝にはもう止んでいました。寒さは緩み、大地からはしっとりした暖かさが伝わって、我が家の菩提寺の梅の花が控えめに美しく咲き乱れておりました。

私は自宅で紡いだ生糸を、商取引をしている河野家に送り届ける途中、ちょうどその寺の前を通りかかりました。

そのとき向かい側から一人の侍が胸をはって歩いてきました。絹のパリツとした羽織袴姿で、腰に二刀を差しておりました。この辺りでは見かけたことの無い立派ないでたちのお武家様でした」

底なし沼3

私はすれ違う瞬間かるく会釈をし、ちらりと男の顔を盗み見ました。立派ないでたちに不釣り合いな童顔で、血行の良い紅い唇と涼やかな目元をした、凛々しい青年でした。

私はすれ違った後、暫し足を進めましたが、妙にその男が気にかかり振りました。

男は寺の門の前で立ち止まり、門前で落ち葉を掃いていた小坊主に對して、

「田中XXと申す」

と齒切れの良い江戸弁で言い、深々と頭を下げました。

小坊主は少し恐縮した様子でありましたが、男が、

「住職はおられるか」

と尋ねると、小坊主は、

「住職はただいま他行中の為、中にてお待ちください」

と言い、男を境内に招きいれました。

私はその男のことを不思議には思いましたが、大した気も留めず、足を戻しました。

私は系を届けると、急いで家に帰りました。当家内山家は村の地主であり、屋敷の入り口には馬が数頭繋ぎ、家屋も立派なものでした。そして私は内山家の一人娘でした。内山家は使用人を数名雇い、農業の傍ら炭問屋を商い財産を築いておりました。私が一人娘であったために、旦那様を婿に取り、商いを継いでおりました。

私が井戸端で水を汲んでいると、旦那様がタンタンと足音を立ててやってきました。

「ただいま、帰りました。今日はお寺の梅がとても綺麗に咲いておりましたよ」

私は夫に對していつものように笑顔で答えました。

「先ほどから、太一がぐずって泣き止まぬ。つるが懸命に子守りをしているのだから。」

旦那様は眉間にしわを寄せながら困ったような表情で言いました。太一とは旦那様と私の間に生まれた赤子でございます。まだ生後八ヶ月ほどでありました。普段から奉公にあがっている、つるという少女に子守りをさせておりました。

「まあ、それは、それは。今すぐ見てまいります」

「ああ、それと」

そのとき旦那様の表情が曇りました。そして、なかなか続く言葉を発しませんでした。

「それと、何ですございましょう」

と私は尋ねた。

「それと、美代に話がある。あとで部屋に来ておくれ」

「ええ、わかりました」

私は頷くと太一の元に向かいました。

つるが必死に腕に抱いて、一生懸命あやしてはいるのだが、太一は大声をあげて泣いておりました。

「ああ、奥様。太一ちゃんがこのように、ずっと泣き止まないのです」

と太一を私に預けました。太一は母に抱かれて落ち着いたのか、指をしゃぶりおとなしく寝てしまった。

「やつぱり、お母様がいいですね」

と、つるが太一の頬をなでながら言いました。

「まだまだ、甘えん坊で困りますねえ」

と私は笑いながら答えました。

そして、私は太一を抱きながら、旦那様が待つ部屋に向かいました。

底なし沼 4

障子を開くと、旦那様が暗い表情で座っておりました。私はびっくりしました。何故ならば、旦那様はお侍様の格好をしていたからです。脇には大小の二本の刀まで置いてありました。

「どういうおつもりでしょうか」

私は太一を抱く手を小刻みにふるわせながら言いました。赤子は私の変化には気づかず、安らかに眠ったままでした。

「まあ、中に入っておくれ」

旦那様は私を見上げながら言いました。

私はふるえながらも部屋に入り、障子をピシャッと閉めました。

「何故、そのような格好でいらっしゃいます」

「実は、明朝、京に上がろうと思う」

旦那様はおっしゃいました。

「今、世間は荒れている。開国をしたために物価は上がり、ここいらでも強盗が増えている」

「確かにあなたの仰るとおりです。しかし、生糸も高く売れるようになりましたし、私達の生活は何も変わらないではありませんか」

「変わらないのは、困る。これを機にこの国を変えたいのだ」

アメリカの“黒船”が浦賀沖に来航したのは嘉永六年、今から十二年前のことでした。この黒船は武力を背景にし、幕府に開国を要求してきたのです。その結果、江戸のお殿様は二百五十年にわたる鎖国を解き、開国をしました。この結果が民衆に多大な影響を与えていたのでございます。

まず米や生糸など物価が急激に騰貴しました。そして世の中が物騒になり、強盗も増えました。この小さな村も確実に影響を受けているのは確かでした。

「都では、天朝様を押したて、新しい日本を創るため全国の浪士が集結しているという」

私はそんな世間の話題など、ほとんど知りませんでした。都も江戸も遠く離れた村であるから無理はないのでございます。

しかし、旦那様は違ったようです。内山家の当主であり、江戸の商人とも取引をしているから、若干の知識があつたようでございます。ゆえに世間の情勢には敏感だつたのでしよう。

「しかし、あなた様は炭問屋の当主なだけです。お侍様ではございません」

私は何故、商人の夫が都に行く必要があるかわかりませんでした。

「いや、郷土の株は買つてある」

私はあつと、思いました。夫は一年前に八王子の千人同心株を買い取っているのをごいしました。そのような思いがあつて、同心株を買つていたとは思ひも寄りませんでした。

「それ故、武士として国論を論じるのは当然の成り行きである」

「しかし、あなた様は内山家の跡取りとして私と縁組したのです。それを今更……。今更、そんなことを言い出すのは無責任と言うものです。だいいち、私達は太一という子もいるのですよ」

私がそう言つて引き止めると、旦那様は大きな刀を抜いて、ぎらりと光る刀を私に向けました。

一瞬にして私の全身の毛穴が粟立ちました。まさか、この温和でいつも弱腰な夫が自分に刃を向けることになるうとは、思いもよらなかつたからです。

「美代、お前がどうしても止めるといふのであれば、その赤子の息の音を止めてしまおう。そして、お前は他の男を婿に取り、今まで通り暮らせばよい」

旦那様は細い目を精一杯開いて博徒のように私を睨みながら言いました。本気であることは私にもわかりました。その瞬間、太一がワッと泣き出しました。

「わかりました。止めませぬ。しかし、この子は無き父に似て賢そうな顔をしていますので、このまま私の子として内山家を継いでもらおうと思います。故に命ばかりは堪忍くださいませ」

「そうか、わかった」

旦那様は頷くと、刀を鞘に収めました。いつもの目のやさしい旦那様に戻っておりました。

底なし沼5

「ただし、一つだけお願いがございます。これが最後のお願いとしますので、どうか聞いてください」

私はすぐるような目で夫を覗き込みました。旦那様は嫌といえなかったでしょう。

「なんだ」と答えました。

「今夜でお別れというのは、私にとってあまりにも唐突すぎることで、気持ちの整理がつきません。最後にゆっくりお話がしとございます」

「うむ…」

旦那様は少し考え込んでおりましたが、最後と言っ言葉が情にふれたのか、目を潤ませ、

「わかった」

と答えました。

「では、明朝、お寺の境内で」

と私は時間と場所を指定しました。旦那様は

「では、明朝」

とボツリと言うと屋敷を出て行きました。

一体何が旦那様を変化させたのだろうと私は思いました。思い当たりがあります。先ほど、寺の前ですれ違った男。きっと関係があるに違いない。旦那様を誑かしたに違いないのでございます。

私の心の中に激しい嫉妬が生まれ、やがて自分を捨てたことに対する怒りに変わりました。

そう女が言つと、私はまた目が覚めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3630ba/>

底なし沼

2012年1月13日20時54分発行